

(以下南西北中央地神天王をそれぞれ繰返す)

(第四) 御湯覗き

19 湯父湯のちちの湯殿へ御渡湯衣は。湯衣は

丈が七尺袖が六尺

20 湯母湯のははの湯殿へ御渡る湯衣は。湯衣は

丈が七尺袖が六尺

附記 第一の「式はやしの清め」の歌詞は、個々のものとしては歌謡の條に挙げたものと略ぼ同一で、再び録する事は重複の感があるが、歌の順序を示す點に於て敢て掲げて見た。本口傳を一方振草系中在家のものとして對比すると、唱へ言の意義等も別であつて、其次第に於ても、祓ひ、湯殿の讃仰、湯東、湯覗き等の順序が明かになる。

「しづめ」祭り反閉口傳 (その一) 振草系中在家

反閉  
返平之傳法

先ヅタスキヲ掛。右足ヲ向エ出シスワル也。次ニ面ニ向イ數珠ジヅヲモミ拜。九字御神法護身五代大尊ソノ印。五印。次ニ面ヲ三返イタダキ申テカムル也。次ニヒシノ印ウシロデムスビ立ツ也。足ヲチドリニヒロイ。右マワリニ東丑寅エマワル也。是迄マワル時ワ。磐古磐古大王王ケン劍ロ。ジジン王ト。トナエマワル也。右ウシロデムスビタル印其マ、左エモドルベシ。左エモドル時ワ。足ヲフミナラシ。リン。ヒヨウ。トウ。シヤ。カイ。ジン。レツ。ザイ。ゼント。フミモドリテ。東エ向イ。右ノ印ホドキ。數珠ジヅヲモミ。次ニライ禮ハイ三返。又拜ミ。次ニ返平反閉始メ。先タチノ印ニテ御バサラダ。ト三返。左リ始メ右ニテモ此印トナエ。同ク也。次ニコウシノ印ニテ。左始メニテ。御九字印菩薩ト三返フミ。又右ニテモ同ク也。次ニ内ジシ印ニテ。御アマリタテイソワカ。ト三返フミ。又右ニテモ同ク也。次ニ下ジシ印ニテ。左始メ御マカ印ソワカ。ト三返フミ。又右ニテモ同ク也。次ニヒシノ印ニテ。左始。御バキヤウバサラウント三返フミ。又右ニテモ同ク也。

先印ホドキノ義者。三返スメバ拍手一ツ。次ニ肩エカマエ。腰コシエカマエル也。東濟ト次ニ左ノツマデ。右ノタチデ。右エ。リン。ヒヨウ。トウ。ト右エ祓イ。又右ノツマデ。左ノタチデ。左エ。シヤ。カイ。ジン。ト左エ祓イ。又左ノツマデ。右ノタチデ。右エ。レツ。

「しづめ」祭り反閉口傳(その一)



ザイ。ゼン。ト右エ祓イ。次ニ三拜致シ。次ニ南西北エ順ニフミマワル也。是次エマワル時  
ワ。ウシロデヒシノ印ムスビ。リン。ビヨウ。トウ。シヤ。カイ。ジン。レツ。ザイ。ゼン  
トトナエ。次エマワル也。四方濟ト中央エモデル也。右ノ通りウシロデ印ムスビ。九字ヲト  
ナエ。左エモドリテ。中央エ右ノ通り。五方濟バ。丑寅エ向イ。カタナヲツキ立。ツカガシ  
ラエ兩手ヲ掛。

南無盤古大王。劍良地神ケンロウジン王

御ソ滿ン圖萬。トウキ權現所繁昌ハ上圖法

トトナエ。次ニ又ヒシノ印。ウシロデムスビ。ア。バ。ウン。ト天地見ル。次ニアトエサ  
リ。三足トフム時ワ。アトエサリ。東エ出ル。三足。三足ト三返フム。足チドリニヒロイ  
ス座ワル。

面ヲ取立テ。カタナ横ニ持チ。東エ向イ。是ヲトナエル也。右順ニマワリ。

保久保久保久としたる山の峯に

石千人と申佛一人立てまします

峯に御座るは花ををり來三堂正三堂正じ奉

谷なる寅寅わ方をたいてよろこぶ

トユウ時ツカ柄ヲ右ノ手ニテ一ツウチテ。

はまんだがはいたるたちわ

千里が内ぬきひびく

ト。是ヲ南西北中央迄。五方同。ツトメル也。次ニ太刀タチヲ拔キ。是ヲ言。右左エマワル也。

白金のみぬきのたちをさいはいで

神門かみかどねろうは宮みやの三郎さけろう

劍立つるまたゆをうが山を我ふめば

茂もろうが門かどは平地と成

次ニケドウ祓イ。タチ太刀ヲフリナガラ。是ヲ申ス。

雲の上の天地てんちく。かすみがしちうけん

劍をばぬいてこそ祓を。いざ祓をやれげどう祓はらをやれ

びしやもんきりに。こびしやもんきりに

是ヲ申ナガラ右ヨリ左エマワル也。タチ太刀ヲサヤエ納ル也。次ニ五代大尊ソノ印ニテ。五方マワ

「しづめ」祭り反閉口傳(その一)



リ。次ニジヅヲモミ。五方マワリ。是迄ニテ相濟。

「しづめ」祭り反閉口傳 (その二) 大入系下津具

護身法返焙ノ大事

先ツ<sup>面</sup>メンヲ著テ。クツニ向ツテ返焙ヲ一返行テ祕子ノ印。後ニムスビ立可シ。

先東ニ向ツテ太刀ヲ立。太刀ニ向ツテ禮拜三返。南西北トモニ同シ。

次ニ太刀ノ印。バザラウンソワカ 三返

次ニカウシノ印。九字院菩薩 三返

次ニ内獅子ノ印。アミリタテイセイカラウンソワカ 三返

次ニ外獅子ノ印。マカソワカ 三返

次ニ祕子ノ印。ギヤウバザラウンソワカ 三返

次ニ丑寅ノ方ニ向テ。

南無盤古大王劍良地神之王。天長地<sup>泰</sup>タイ御願圓滿家内敬白トツキ。權現圓滿法王ト七度ノ禮

拜

次ニ辰巳ニ向テ。右ノ印明。同印ヲハヤメテハクシヤウ之印。カタナヲ腰ニ構ヘテ廻ル。

次ニ辰巳未戌亥ヲマワツテ。

次ニ丑寅へ七度ノ禮拜スルナリ。

次ニ丑寅へ向テ三足。又立チマワツテ七度ノ禮拜。合セテ二十一度ノ禮拜スベシ。



第一六四圖

又返焙ノ事 (之は別種口傳なり)

コウシノ印ニテ向飛ニフミ。

七度ノ禮拜。三足。

「しづめ」祭り反閉口傳(その二)



盤古大王劍良地神之王トツ、ノ印ニテ。三返。

太刀ヲ腰ニツケフミ。マワル也

太刀ノ印ニテ水ヲクミナゲル。

太刀ニテ水ヲクミナゲル。

二拍子

印ヲムスビテフミハジム。返焙一度ツ、。三度。

悪除  
アクヨケ

1 東方へ、<sup>甲</sup>きのえき<sup>乙</sup>のとの方より

2 龍子供 つかのこどもが集て。ざんざらめかいて

3 黒よね白よねひきつれて

4 此三せんまいると見れば。みつるぎみつるぎ

東南西北右ノ通り五方へ

5 東方<sup>甲</sup>きのえき<sup>乙</sup>のとの方よりも

6 悪魔 奴原  
あくまのやつばら

7 龍王 剣退  
りうおうやつるぎにしりぞかれて

8 此三せんをいでるとみれば。みつるぎみつるぎが

東南西北中央五方へ。コノ通り能々トナフ。

附記 茲に言ふ悪除は、面形を除つての行事で、一に外道祓ひといふものと同一である。

舞ひの口傳

大入系下津具

學之舞

一 學<sup>樂</sup>役。太鼓鈴音物祓上。七五三打テ舞人請取り。竈前ヨリ三拜宛五方濟シ。又侍リ一拜宛宮ナ  
ラシニテ五方舞。又バチヲフリテ五方舞。竈ノ前ニテ一拜濟。學<sup>樂</sup>ヲ七五三ト打。學<sup>樂</sup>役エ渡ス。

式三番神

一 竈之前エ向三拜。宮演習<sup>ならし</sup>にて五方舞又アクマニテ五方。一拜濟引。是ハ壹人宛三度ニ舞。

舞ひの口傳



註 本文アクマは惡魔で舞の手である。

御神樂

一 宮演習四人デ一度。アクマ四人三度。十二折初終リニ式ニ拜有リ。

地固。初メ終ノ式拜有リ。

一 宮演習ニテ五方ヲ濟バ逆ニ周。順逆ト四度。隻手も兩手モ後合モ。入ハネ四度宛。又アクマデ先ノゴトク勤。入ハネ終トオソギをタ、ミ。竈ノ後へ周。竈前ニテ壹人遍場。オフギヲムネニアテ。前向後向。又ヒザニアテ前向後向。夫ヨリ三度倅。竈前ヨリ初。四方遍平。是モ濟ト三度倅。濟ト竈前ヨリ四方入濟ト。三遍ハネノマ、倅。竈前ニテ入ハネシテ拜ニテ引。次ハ木太刀。劍。二折共ニ右ニ順ジ。

註 一 一人遍場は「一人へんべ」であるが、次の註二は遍平の字が充てゝあるが、共に同一に解して宜いと思ふ。然

し「へんべ」は「へんばい」即ち遍倅等の文字を充てた場合もあるから「へんばい」「へんべ」二様に行はれて居た結果、斯く記したかと思はれる。三 木太刀は一般に「やちこま」又は「ぼうづか」等の名で呼ばれて居るもの。

綾之舞

一 綾笠ニテ舞。扇子デ舞。四方ヘン平迄ハ先ノ舞ノゴトク。夫ヨリ入舞ハ。三ツアヤニ入。三度濟。是モ三遍倅。竈前アクマニテ拜シ引。

註 綾の舞は、花の舞のことで、従つて綾笠は一般花笠と言つて居たものである。

山見物鬼ヲ出

一 竈前ニテ四方見。竈後ヲ同ニ座敷ノ見物イタシ。竈前ニテ切初。五方ヲ切。四方タツハ丑寅未申辰巳戌亥切。ビヤツカイハ東西南北舞。一周。竈前舞。竈後ニテ舞。又竈ノ前ニテ舞直ニ引入。

註 一 四方見は鏡を杖に突き見得をすること、一に五方見ともいふ。二 座敷は舞戸四隅の座なり。三 切初めは竈

舞ひの口傳



の前に来て、鏡を兩手に執り、天地中央を切る。之に掛る最初を言ふ。四 四方タツは四方立である。五 ビヤツカイは「びやつけはらひ」の意。

市ノ舞

一 五方三拜宛致舞立。三遍ハネカヤシ。三人三度ニ舞。

三津舞

一 扇子ノ手ハ花ノ舞同様也

ヤチゴマ ツルギモ四方入三遍侍迄ハ同。夫ヨリ三遍揉返。竈前ヨリシンゴミ一周ニテ。

竈ノ前ニテキシム。又竈後ヨリシンゴミ。竈前ニテ三度。又三遍揉三遍シテ。ザシキノ

カブル。竈ノ前ヨリキツサキニテ三遍揉。三遍シテ座敷ノカブル。竈の前ヨリ劍ヲ兩手

ニ持テ。随分額上へ高差上周ス。是モ三遍返。座敷ノ後へ周。竈ノ前アクマニテ拜引。

註 一 シンゴミは尻込みで、後退。二 キシムは不明であるが、前後の状況から舞の手の中の「ばんや」と思ふ。

三 カブルは「かぶり」で、頭上で廻すこと。四 劍とあれど「やちこま」も含むと思はれる。

神改懸合

一 竈前ヨリ座敷ノ五方見物致。竈前ニテ切カ、ル。(以下問答の詞につき略す)

梵舞

一 白張持四ツ評ニテ竈前エ舞出押周。肩ヲ揃エ五方舞。左ノ手ヲ出シ逆順四度。兩手ニテ四度。後合テ四度。左ノ手ヲ出一周入。右ノ手ヲ出一周入舞。相手二度入。又入替リ二度大周二度。夫ヨリ白張ヲ著。右ノゴトクニ竈前ヲアクマデ濟。扇子ヲタ、ミ。竈後周。壹人遍平。扇子ムネニアテ一周。又後向一周。コシニアテ一周。又後向一周。扇子アゲ。三返ノアクマデ侍。四方遍平。三返侍。四方入三返侍。惡マデ三返舞。竈ノ前テ入テ四方アヲリカケ。竈ノ前ニテト乙ト合濟。三遍揉。三遍揉。前合又三遍揉。後合三遍揉。又高ク上。惡マデ三遍侍。竈前ヨリ鳥バミ三ベンニテ舞上。

註 梵舞は四ツ舞の扇の手である。斯うした稱もあつたらしい。一 白張ははくちやうで即ち「ゆはぎ」である。二 四



ツ評は「四ツ拍子」。三 左ノ手ヲ出シとあるは、片手の扇合。四 一周入は一周り入舞であらう。五 一ト乙は一と二の誤か、又は市と乙とする如き稱があつたものか不明。六 鳥バミは一般に鳥跳びといふ型である。

木太刀劍舞

一 四方入三返悖迄ハ先ノ通り。又揉竈前ヨリシンゴミ。竈前ニテキシミ揉周。竈ノ前ヨリシンゴミ。竈後ニテキシミ揉。竈ノ右ヨリシンゴミ。右方ニテキシミ揉。左方ヨリシンゴミ左ニテキシミ。夫ヨリ三返タメ悖。又キツサキニテ三返カヘルニ。座敷くカブル。劔ヲ竈前ヨリ兩手ニ持テ。隨分額上へ高ク差上回。是モ三返シテ。後ハ座敷くニテマワス。竈前ニテ惡マデ拜シ引。

竈 濯

一 湯タプサ兩手ニ持。竈前へ舞出ル。是モ四方入三返悖迄ハ四ツ舞通り。一人遍平ナシ。是ヨリ三返揉四方アヲリカケ四ツ舞ノトウリ。アクマニテ三返悖揉。前合四方ニテ又三返タメ。後合四方ニテ又三返タメ。ソバ湯四方ニテ又三返タメ。本湯四方ニテ立ル。三返キレ

イニ竈ヲ濯ベシ。夫ヨリ鳥バミニテ拜シ引。

註 竈濯は「かまあらひ」で、即ち湯ばやしの舞である。一 ソバ湯は本湯に對する語で、竈の湯に「湯たぶさ」を僅かに浸し振かける事。二 立ルは湯立の立で、湯たぶさを湯に浸すこと、之より湯を振りかけるのである。以上舞の口傳書は、原文は平假名との混り書であるが、全部片假名に改めた。

花祭一切の傳法 (拔萃) 振草系中在家

是ハ不動明王五方立之傳法

- 東方降三世夜叉明王
- 南方軍荼利夜叉明王
- 西方大威得夜叉明王
- 北方金剛夜叉明王
- 中央大日大聖不動明王

花祭一切の傳法



同五方立之傳法

東方ガ藥師トシルベシ

南方ガ觀音ト

西方ガ阿彌陀ト

北方ガシヤカ

花祭刀立ノ傳法

先御幣ヘイ切始メ法。先まカキ板ニ。紙ニヘイ串。小刀ヲノセオキ。

よろこびのつげの板とは是をゆう

あくまをはらふあくだらの板

南無アビラ御ケンソワカ

三返

此竹は高天原にはえし竹

神の用に立ぞ目出度し

右三返

此紙はつくばが山のたから紙

神の用に立ぞ目出度し

右三返

手に取りし刀は何とゆをうらん

もんじゆのりけん不動くりから

右三返トナエ。クジヲ切り。ヘイ串壹天。ノサ壹本。御酒シ鹽ヲ。サングウヲ獻。

九字御神法護身ヲコナイ。次ニ五大尊ノイ印ン。氏子心ヲソロエテ。

來る何日に。拾石拾貫文百石百貫

千石千貫文の。佛法つくさせ

大寶蓮華の花をそだて差上官上勸請申奉る。いさぎよく御請取の上の所を御官上勸請御祈念奉。急

々如律令と敬て申

次ニ。祓信經シンギヨウ壹卷。觀音ノヒケン壹卷ツトメ。

花祭一切の傳法



次ニ。カノ御幣ヘイエ。當所氏神。日本大小神様。東南西北中央ノ不動明王様。正請ジトノ附官上殿申也。

南無アビラ御ケンソワカ

ト三返。月天様ノシユ。呪

御センダラヤソワカ

ト二十一返。水神ノシユ。呪

御水社オンスキヤソワカ

三返。山神ノシユ。呪

御南々ナニクチリクウソワカ

三返。秋葉山ノシユ。呪

御キバリカヤシヤアソワカ

三返。荒神ノシユ。呪

ケンバヤ加持ソワカ

三返。カジニハ薬師ノシユ。呪

御コロクセンダリマトウギソワカ

二十一返。不動ノシユ。呪二十一返右ノ通。九字御神法護身五大尊ソノイニテ、ヲミ上三申也。

但シ串ノ丈二尺八寸。ノサ串一尺五寸。紙四枚ニテ上日迄御酒洗米燈登明獻申也

註一 サレグウは、サング、サング、サングウ等謂ひ、口傳書に據つては、參供散供等の文字を充てた場合もあつて、

散供の意に取れるが、現在では洗米即ち「せんまい」を言ふやうである。

二 ヲミはヲガミのがを脱落せるものらしい事は、他の場合から判断される。

三 上日(じょうび)で、「かたなだて」の行事に對し、本祭り即ち行事次第に言うた第二日の祭祀を指すのである。

一。次ニ上日御祭始メ。先大ザ催、ヲ立。七五三シハリ。

### 瀧祓口傳

一。瀧祓ニワ。タトウ紙エ。水神ト書テ。串ノ丈一尺二寸。祓山神ベイ壹本。串ノ丈一尺五寸。御酒五ハス坪。三ツ切皿三枚。祓錢拾貳文。鹽シヲ。サングウ獻申テ。御ツトメニハ。

花祭一切の傳法



一。天津祝詞壹卷。六根コソノ被壹卷。三字ノ被。二十一返。水神ノシユ。御水社ソワカ  
 二十一返。山神ノシユ。御南々チリクウソワカ  
 二十一返。不動ノシユ。二十一返。一切ジヨウジュウノ被。三返ヲガミ申也。次ニ皆々御コリ垢離  
 掛ケル也。カノ瀧ノ水ヲクミ上テ。へ屋。神座。舞度ヲ清ム也。

註一 五ス坪は「こすつば」で酒を入れる壺と考へられて居る。従つて神前に供へる酒は、酒といふ一方に「こす」の稱を用ゐたのである。尙合敷(こすす)御ス坪(こすつば)等も同一の意である。

高子祭口傳

一。次ニ高子祭。紙一枚宛ニテ。天神ベイ五本立。被ベイ一本。申ノ丈一尺五寸。天神ベイ  
 申ノ丈二尺一寸宛。  
 次ニクモツ。クツワ御ゼン三ゼン。切皿八枚。御ス坪八ツ。ソバモチ。イモ。トコロ。栗。  
 栖。御酒ヲ獻申テ。シヲ。サンゴウヲ振。九字。御神法ヲコナイ。  
 被ニリ。天津祝詞一卷。六根コソノ被一卷。三字ジノ被三返。次ニ高子様ヲ。五大尊ノインニテ

此御所デ御官上申奉。御高子大権現様エ。此御所ヲソレト以テ。白(殿字)幣帛ノヘイ白ヲサ、ゲ。  
 ゴウ數。ゴウ料ヲ獻奉テ。御官上ノ所ヲ申奉。キヨクイサギヨク。御請取ノ上ノ所ヲ御祈念  
 致奉ル。急々如律令。次ニ。シンギヨウ三卷。觀音ノヒケ一卷。次ニ日天様ノシユ三返。荒  
 神様ノシユ。御ケンバヤノソワカ  
 二十一返。不動ノシユ。八返トナエ。九字御神法。五大尊ノインニテ祭上。此トノ信言。  
 御コロノシヤボウケイツワカ  
 次ニ立テ。右ノ方エ向。ジツヲモミ拜ミ。次ニ九字。御神法。又ジツヲモミ拜ミ。次ニ五大  
 尊ノ印ニテ。

東方降三世夜叉明王

ト官上致シ。次ニ返ベイ。五印ニテヲコナイ。右五大尊ノ印。次ニタチノ印ニテ。御バサラ  
 ダウント

左デ一度。右デ一度。又左デ一度。

南方軍荼利夜叉明王

トトナエ。次ニコウシノ印ニテ。



御九字印菩薩

トトナエ。右ノ通り。次ニ。

西方大威徳夜叉明王

トトナエ。内ジシノ印ニテ。

御アミリテイソワカ

トトナエ。右ノ通り。次ニ北方ニ。

金剛夜叉明王

トトナエ。下<sup>外</sup>ジシノ印ニテ。

御マカインソワカ

トトナエ。右ノ通り。北方迄濟ト。左エモドリ。中央ヒシノ印ニテ。

御バキヤヨウバサラダウシ

トトナエ。次ニ五大尊ノ印ニテ。右エ。

南無大日大小不動明王<sup>聖</sup>

トトナエナガラ。北方迄廻ル也。次ニ。

御シユリノマカシユリソワカ

トトナエナガラ。左エモドル也。

謹請再拜々々恐美々々申順。

次ニ天<sup>三</sup>バク返シ

謹請東方ニ一萬三千ノ大天狗小天狗

大天<sup>ゴ</sup>白小天白。ヲボロキヒボロキ

我<sup>ワレウケナシヤウ</sup>請<sup>シ</sup>何<sup>ナニ</sup>事<sup>コト</sup>町<sup>チヨウ</sup>ノ神<sup>カミ</sup>ヤタチ。是ヨリアラワレマシマサバ

アラワレタマエ。ウツテマシマス

トトナエ。東南西北中央天地。右同斷ナケモチスルベシ。

註一 カツラ御セン、神御膳で、圓形の膳即ち一般に言ふ丸膳を指したものでらしい。花祭りの行事に於ては、「くつがた」

の餅とて、「くつわ形」即ち圓形の餅を(杵形ともいふ)神前に供へる風があるから、膳も又斯く呼んだものでないかと思ふ。然し丸形の膳を神膳(くつわせん)と呼ぶ事は未だ聞いて居らぬ。

二 ゴウ料「こりやう」「こりやう」等言ひ、「こす」を酒と考へるに對した對語で、供物を指すのである。

三 天バク又は「てんぱく」とも言ふ。天狗、みさき、きみさき等と共に、一種の神靈と考へられて居るもので、祭祀

花祭一切の傳法



の行はれて居る地方には、各所に之を祀つた跡がある。

辻整(註ツジガタメ)ノ傳法

辻整ノ平幣ハ五色ノ天神平幣一本。申丈一尺二寸。祓平幣一本。申ノ丈一尺五寸。是ハクモツ三膳。御ス坪蓋三ツ。切皿三枚。御酒。イモ。トコロ。栗。カヤ。柿。祓錢ハライセン十二文。シラサングウンナエ申也。

次ニ天津祝詞一卷。六根ノ祓一卷。九字御身法護身。次ニ一切成就祓三返。

次ニ東南西北中央ノ。不動ノ五印ヲヲコナイ申也。

官上ノ所。不動明王之御祈念ヲ以テ。荒神。荒御靈ミサキ。アクマゲドウ。此所ヨリ内エハ。ハ

イリタマワントノ御誓願也。御荒神様。アクマゲドウ。御テキ様エ。此御所テゴウ數ゴス。ゴウ料

ヲ獻申テ御官上申也。

次ニ心ギヨ三卷。日天様ニツナンノシユ三返。月天様ガツナンノシユ。御センダラヤソソカ。三返。不動ノ

呪シユ二十一返。觀音ノヒケン秘卷一卷ツトメ。九字御神法護身五大尊ノ印ニテ。御コロノシヤボウケイソワカ。三返上。次ニ立テノヲコナイ。高根祭ノ門カドシメベト同。

東方降三世夜叉明王トトナエ 同五印也

南方軍荼利夜叉明王トトナエ 同五印也

西方大威得叉明夜王トトナエ 同五印也

北方ニ金剛夜叉明王トトナエ 同五印也

中央大日大小不動明王トトナエ 同五印也

右五印ニテ五方廻リ。モドリテ。中央スルト。五大尊ノ印ニテ。東方ニ降三世夜叉明王ト南方ニ軍荼利夜叉明王。西方ニ大威德夜叉明王。北方ニ金剛夜叉明王。中央大日大聖不動明王トトナエ。ジスヲモミ廻ル也。

次ニ。正シヤロウノ印。

御バサラギニ。トウバンウン。バツタソワカ。ジャク。ウン。バン。コクト三返。

次ニ天バク返シ。



(唱へ言高嶺祭の天バク返しと同一につき略す)  
右之門トナエナガラ。ソナエヲサゲ。五方天地同斷ナゲルベシ。

神入ノ傳法

先ヅ神前ニ向イ。シヲ。サンゴウヲ振り。九字御身法。五大尊ノ印ヲヲコナイテ。天津祝詞一卷。勸請申也。次ニ。

神ビロイ

(神ビロイ即ち神下しの神名帳は、別掲の神下し祭文と略ぼ同一につき略す)  
是迄勸請致シ。御平。ネギハリ。ミヨウド舞子エ渡ス也。切クサ一切殘ズ。外ニモ清ジヨ  
キモノニハモタセ。右刀立ノ御平ハ。所ノネギガ持テ。アマエ渡ル也。

(此處に神下しの祭文即ち祝詞があるが。之も別に祭文詞章として掲げたものと略ぼ同一につき略す)

是迄ニテ

入ませや何か成神も入そめてくく

入ての後わ神谷かやさな

ト申乍ラ神座エ出ル。所ノ神主先ニ立テ。右廻リニ神座ヲ三度廻リテ。アマエ渡ル也。

天ノ祭ノ傳法

天ノ祭ノ御平ハ。天神平。青黄白赤黒一天ツツ。ヲリ平一天。ケンホコ上ル也。右五色ノ平  
ワ。紙宛ニテ。串ノ丈二尺八寸。ヲリ平ワ。スミカラスミエヲリ。アマリヲ切ステ。串ノ丈  
同。次ニ御タナエ。御平ノカザリヨウハ。先ヅ東ヨリ順ニヲリ平ヲ立。青黄白赤黒。カタナ  
立ノ時官上申タル氏神ノ御平。其内ノ中ニ立ツルベシ。ケンホコ中ニカザルベシ。次ニ  
クモツノ數ワ。七十五ゼンニ。六十六。十六。七ゼン。切皿。御ス坪數。右同ク獻スベシ。  
同クモツ。イモ。トコロ。栗。カヤ。柿。ソバモチ。御酒獻申也。

次ニ官上致ス。九字御神法ヲコナイ。シヲ。サングウ。  
次ニ天津祝詞。六コンノ祓。天文祓一卷宛。一切成就祓。

きわめてきたなきも

たまりなければきたなき事はあらじ



内どの玉がき清く清し

ト申。三返。

八百萬ノ神立達。神ノ前ニ申ヲカス傳法。九字御神法護身。五大尊ノ印ニテ申ヲカス。

高天原がこゝ成ば

あつまりたまえ四方の神々

ト申。日月日光。三方大荒神寶。土公荒神。水神。山神。御イナリ大明神。年神。門神。八正

神。御エベス大荒神。三十八社ノ御鎌鎌ノ御神。地神。ウガノ神字賀。所ハ當所ノ氏神。天王。八

王子。諸大權現。諸大明神。諸神諸菩薩。地神。ウガノ神。惣氏子中ノ當ケ本ケノ守本尊。守本尊。

大阪ヨリ東モ三十三ヶ國。西モ三十三ヶ國。合テ六十六ヶ國ノ大小ノ神祇。高キ大神。五萬

五千五百二十四座ノ神祇。御アワサン大權現。御アタゴ山大權現。金比羅山大權現。大小不

動明王。今日中ノ大小ノ神祇。三千一百三十二神ノ御神。天ノ二十八宿。七曜。九曜。明妙見。

大菩薩。禮風神ライフウジン。一一玉萬イチイチキョクマン。此座申ヲロシ。合ゴス。合料ヲ獻申テ。右ハ大願之所。

今日今日。吉日エラミ奉テ。大大寶。タイ法蓮タイホウレンノ花ハナヲソダテ。差上官上申奉所。清キヨ。勇イサキ。御請取

之上之所ヲ御官上勸請。御祈念奉ル。是ワ心ノ中ニテ官上申也。

次ニ大祓一卷。次ニ五代大尊ソノ印ニテ。東西南北中央不動様同。次ニ荒神六印。大刀(大體

の意カ)口傳。先九字御神法護身。次ニジズ數珠ヲモミナガラ。御ケンバヤ一ノギヤバク一ノサン一

ウバツタソワカ。三返。次ニ内ジシノ印。メイリウ天ヲン。三返。次ニシ鹽ヲサンゴウノ印。

御ケンバイ一ノギヤバクサンゾウウンバツタソワカ。三返。次ニ下ジシノ印。御ギヤバク一

バンバンソワカ。三返。次ニ「三」(?)シ鹽ヲ。サンゴウノ印。

年をえて身をさまたげるあらみさき

皆さりはててよにちよと見せん

三返。次ニガッ合シャウノ印。本信イ信ギヤウ。

うじようくうりん。しくしよう安樂

無いしやきようせんじ

ひいり正うんとうこう來正こう氏

三返。

一。アタゴ六印。火シヅメ。火ノ印。御バサラギニバツタソワカ。三返。下外ジシノ印。御子コ

ロ一ノシャボウケイソワカ



内ジシノ印。御ジャクウンソワカ

チケンノ印。御サンバラ／＼キリクウンソワカ

ヒシノ印。御バキヨウバツタソワカ。玉ノ印。

ゐすゝ河清きながれわあらはれて

われわにこれる水にやどらん

御バロタヤソワカ

一。天狗六印。ケンノ印。御アビラ御ケンソワカ

ハネチガイノ印。

袖ノガツカンロウモンタビコテニ

ソコノリヤクハボソウラヒク

イヤマンジソウバツタソワカ

同コウシノ印。ウンウンキリクウンソワカ

上天狗ノ印。御バサラギニソワカ

下天狗ノ印。御マトギリソワカ

天狗葉チガイ。御安令々々バツタヤソワカ

天狗ムシヨウフシヨウノ印。御ヒラ／＼リヨウ正ソワカ

天ノ祭。大火ブセノ大刀。

南無相愛染ゼン大菩薩。祈神。(?)水神。フン水平水。馬頭尊バドウンソ神

之迄数珠ジヅヲモミナガラ官上申。

水ノ印。

流のみこしが

なぶんごじづうとが。こくをくようり

しろうみ見えるわ

伊づ名いづなの八天狗

あすらかずらの登の火わ

フシバクバシノウンダラク

アクビラ御ケンソワカ

五返。是迄天ノ祭ノ大刀。

花祭一切の傳法



次ニシンギヨウツトメ。

次ニ日天様ノシユ三返 (呪文前と同一につき略)

月天様ノシユ三返

水神様ノシユ三返

山神様ノシユ三返

荒神様ノシユ三返

金比羅山ノシユ。御ヘラノコソビラコンテイソワカ。三返。

阿タゴ山ノシユ。阿ワ山ノシユ。薬師ノシユ。観音ノヒケン。秘卷。一卷。

九字御神法。御代ソンノ印ニテ。不動ノシユ。

返平五印ヲ。ヲコナウベシ。

諸願上重改良萬ゾク。ケツ上圓萬急々如律令。御コロノシヤボウケイソワカ

ト拜上申也。次ニ立テ。天白返シ。五方天地ナゲモチスベシ。

切ル目ノ王子

勘敷木綿三反。東南西。一反宛。參錢一貫二百文上。

(此處に神下しの祭文と、神名帳があるが、前の神入りの場合と殆ど同一につき略す)

しめをろし

七五三をろし。をろす里さに千早振。千早振ちわ振神の舞と成るらん

東方御門薬師の御前で七五三おろすく

おろす里さに千早振千早振

ちわ振神の舞となるらん

南方御門わ観音の御前で右同申也

西方御門わ阿彌陀の御前で右同

北方御門わしやかの御前で右同

是迄ニテ左エモドリ中央ヲ申也。ツイデニウタグス。コギヒローベシ

中央御門わ大日上度で右同



- (1) しきなればしきほど申すいいつとともく  
しきをば神の一重たまわな
  - (2) 秋すぎて冬の花とは今日かとよく  
風もぬる風やあよにさく花
  - (3) しも月のあたらがしまヲ申
  - (4) 七瀧や八瀧の水ヲ申也
  - (5) しようじやのしようじのおしめ……
  - (6) しようじやのしようじのおこも……
  - (7) しようじやの舞どをかざるをしめ竹……
  - (8) 神道はちみちも、づな……
  - (9) 神々の御渡る道にあやをはり……
  - (10) 伊勢の國高天原がこ、なれば……
  - (11) やらうれしやらよろこばし……
- 次ニ五方立。右マワリニ。

東方御門みかどわ薬師の御前でつゝめがつゝいて  
成物なりものなつてふうきしてん  
くうろうもんのほう所じよのくすりが  
取町山とらちやまがぞんじようなれば  
南西北同斷。左へモドリテ中央右同。

註一 コギヒロベシは「こぎをひろふべし」である。「こぎ」は何の意か判らぬが、「こぎひろい」は、歌詞を次々に拾ひ數へる意である事は已に言つた通りである。

次ニ

惣ソウカイ向ムカイ、鎌一緒被ヒ。イツシヨ也。  
惣ソウカイ向ムカイワ。キル切目メノヲ、ジノ通り。神神ビロイ申也。  
釜鉢被ヒワ。人ニワ見セズ。ツ、シムベシ。釜鉢ホコヲ立ル時。  
打立ること、が高天原なれば

花祭一切の傳法



祓いすてけるあらいその濱

日天様ノシユ。三返。先ヅ釜エ向イ。九字御神法。シヲ。サンクウヲフリ。五代ソノ印ニテ。

南無三十八社ノ御釜ノ御神

天津祝詞。六コソノ祓。一切上重ノ祓。三返。釜祓一卷。火ブセ水ノ印ニテ。

御マトギリヤソワカ

ト。三返。此印。左ノ袖ノ下ニテ。シツカトムスブベシ。

次ニ釜ノ中ヲヨリ。木ヅリヲ出シ。

水天明王水正ソワカ

トトナエ作ラ。五大尊ノ印ニテ。諸願上ジユウ。急々如律令ト拜上。

次ニ立チテ釜エ向イ。ジヅヲモミ拜。九字御神法。五大尊ノ印ニテ。

東方降三世夜叉明王

ツイデニ五印ヲコノウベシ。之モ右へ順ニマワリ。五印ハ先。ケンノ印。御バサラダト。左一度右一度。又左一度。コウシノ印。御九字イン菩薩右之通。三返。内ジシノ印。御アミリ

タテイソワカ

ト右同。三返也。下ジシノ印。御マカインソワカ

右之通り。ヒシノ印。御バキヤウバサラダウン

同。中央大日大小不動明王。

次ニ内ジシノ印ニテ。釜エ向イ三拜。御アミリタテイソワカ

ト。天ヲワル。是ワ右エマワリ。一ライ拜。左へモドリニ。一ライ拜。又右エマワリテ。一

ライ拜。

次ニ下ジシノ印ニテ。地ヲハル。御マカインソワカ

ト。同マワリ。次ニヒシノ印ニテ。中ヲハル。御バキヤウバサラダウン

ト。同マワリ。次ニ天ヲハル。タチヲヌキ。

此御たちと申るわ

神前でわしいしのほうけん

佛の前ではあくまごうぶくすとのりけん也

ト。トナエイタダキ。次ニタチヲ目通りニ持チテ。釜エ向イ。一ライハイ。



荒神やちるもちらぬも立べしぞ

我このとこ此所こゝにあらん限りわ

ト。トナエ。右三三コンノ印。ヲコナイノ通りマワル也。來禮拜一度宛。次ニ地ヲハハル也。地ヲハハルニワ。タチノキツサキヲ。地エサゲテ。右マワル方エムケテ。マワル也。トナエル事モ同。マワルコトモ同。タチ取ナラシ太刀マワル也。次ニ中ヲワル。タチ目通ヨリ少シサゲ。横ニ持。トナエ事同。マワル事モ同ク也。來禮拜モ同事。次ニタチヲ太刀ヲコナウ。

リン。ビヨウトウ。シヤ。カイ。ジンレツ。ザイセン  
ト三返太刀タチヲツカウ也。次ニタチヲ太刀フリ。  
雲の上の天地こゝく。かすみが下。中けん

劍をばぬいて被を。いざ被ふやれ  
けどう稜。彌毘沙門れびしやもん切に

小こびしやもん切に

ト。是ヲトナエナガラ。右ヘマワリ。左ヘモドリ乍。是ヲユウ也。次ニ劍タチヲサヤニ納メル。  
次ニ不動五大尊ノ印ニテ。

不動ジクノ門

ト。トナエ。右エマワリ左エモドル。次ニジ數珠ヅヲモミ。右エマワリ左エモドル。是迄也。

次ニガクノ舞

次ニサルコバヤシ

次ニ數シキバヤシ

次ニ當トウゴバヤシ

次ニ順ズンノ舞

次ニ一イチノ舞

次ニ地ガタメ

次ニ花ノ舞。

ボンノ舞カラ。

神ヲロシ。申附神ビロイワ。切り目ノ王ジト同也。



以上掲ゲタ他

サルコバヤシ

シキバヤシ

トウゴバヤシ

カザリ物申付

花ノホンダ祭文

湯立ノ傳法

反<sup>反用</sup>平ノ傳法

花ンダテノ事

火ブセノ呪符

等は總て他の口傳と比較の便宜上他に引用又は略した。

附記、本口傳書は、振草系中在家(なかんせき)の福宜屋敷(一にさかき屋敷)佐々木嘉一方に保存されたもので、奥書に據ると、佐々木氏の祖父源五郎氏の筆録であるが、之が底本は、同所に祭祀を傳へた足込(あしこめ)にあつて、二三の類本もある。

行事の口傳を、斯く大部分の次第に亘つて記したものは稀であるから、本来原本の儘に採録したかつたのであるが、

他の口傳と比較の便を思ひ、一つには重複を避ける關係もあつて、處々省略又は他に移すの止むなきに至つた。尙聞讀の便を願うて時に行を更め、句點を施し、本文脇に記註を加へる等を爲したが、其他は總て原の儘で、奥書は左の如きものである。

當所熊野神社

以前者長峯ニ守護右者明治三年午十二月三十日ヨリ當所エ奉守護候也

是ヨリ三年後ヨリ花祭始リ申候

愛知縣下三河國北設樂郡奈根村字中在家

明治五年十二月吉日

權少講義

佐々木源五郎

弘化元年甲辰四月十日生

### 祭禮花神樂傳記

神甕幸フ皇御國ハ神ノ御國ニシテ、神祇官ヲ大政ノ上ニ置カレ、神祭大政ノ一ニシテ、安國ト平ク安ク知食ス所ノ大御國ニシテ在ケルヲ、星霜移往クニ隨ヒ、外ツ國ヨリ、佛ノ道舶來テ神ノ祭モ葬事モ、古ヘノ如ナラス、年久ク廢レ來ヌルニ依テ、明治ノ帝慨思召テ、神ハ



神佛ハ佛ト洗改賜フ大勅ヲ恐ミ奉、是ノ三津栗ノ中設樂ノ産土ノ氏子悉ク、神ノ祭モ遠祖ノ祭モ古ヘニ復シ、菩提所東泉寺ヲ廢スルノ時、住僧伊藤梅妍、進テ神道教官ニ職ヲ改メ、共ニカヲ合、郷々ニ舞傳フル花神樂、何人ノ傳、何レノ頃ニ事始メシヤ不詳ドモ、大ヒニ佛道相交ヘ、夕ノ間ハ兩部神ノ形ナレドモ、夜半ヨリ後ハ、地獄極樂ノ在様ナリ、願フラクハ唯一神道ニ洗淨メムト、左ニ誌セル臣ワレ等ニ申出ルニ依テ、二人共ニカヲ合、心ヲモ一ニシテ舊祠官并眞齊ト云物、知人ニ事問フニ、答ケラク、伊勢大神御記所ニ、三河國設樂郡ノ人設樂ノ舞ヲ奏スト在ト聞傳フ、然在レバ、天ノ石戸明ケ、宇受賣ノ御神樂成事明ラカ也、トマレ予モカヲ補ヒ、洗改メント、白サレシカ、老ノ病罹ラレ、神避玉ヘシニ依、力無恐カレドモ、古事文ヲ窺奉、覺束無クモ、氏子ノ望ニ任セ、謹デ硯ニ寄古キ拍子、手振ヲ用ヒ、只佛語ヲ除キ、舞式ヲ改メ、拙クモ左ニ花神樂ノ祝事ヲ誌侍ヌ

筆者

神	道	教
官	三	高
文	治	印

### 花神樂祝事

仰モ是ノ花ノ神樂ハ、神ツ大御代、天ノ石戸ノ、宇受賣ノ藝ワヂキ、傳フル處ニ候也、畏カレトモ、吾此御國ハ、天壤始テ分レ高天原ニ、成座ス神ノ御名ハ、天ノ御中主ノ神也、其別神靈左リニ座ハ、高ミ産巢日、右リニ座ハ、神産巢日ノ神也、此ノ二神ラガ、産巢賜シ、伊産奈岐命ニ、伊座奈美命、高木ノ神ノ勅ヲ以テ、天ノ浮橋度立シテ、野矛ヲ以テ、漂フ潮泡搔成賜ヒ、國土造ラセ候也。四方神道ハ浮橋ノ形 二神天ノ浮橋度來テ 舊白蓋ハ天津神籬也 男古呂島ヲ造竟シム

亦恐クモ造賜ヒシ、遠迺古呂島ニ、天降賜ヒテ、嫁ノ道ヲ初賜ヒ、萬ノ神々生張給ヒ候也。奈岐奈美ノ余波久那部利ニ學作 サセテノ 鶴倫是也 止都岐ノ道ヲ波自米タルカナ

命ハ、奈美ノ命ヲ葬ラセ賜、夜毛津穢ヲ、日向ノ橋、櫛ノ原ニ禊淨賜ヒ候也。舊一ノ舞三折、表 子浪音ニテ今鹽 橋ノ小戸ノ濯禊ヲ初ニテ 筒中筒底筒ニテ拍 湯引麻打米是也 今モ清ムル是ノカム床

神也。日之神ニハ日ノ大國、月之神ニハ月讀ノ國、所知食サシメ候也。此時豐受之神ヨリ、五ツノ穀物ヲ備奉候也。



天照御神ハ、熊之大人以狹田、長田ヲ開カセ、播殖賜候也。其秋垂顛ノ八握ニ  
 莫、甚快實法候也。是天津國ニテ神嘗祭ノ始也 此時須佐之男神ハ、海原所知世ノ勅ヲ鳴喚リテ、荒ビ建ビ秋  
 田長田畔毀、溝埋樋放馬伏、生剝逆剝、御服織真屋迄、惡仕業ヲ振舞申候也。舊山割次郎坊鬼、白蓋ヲ荒舞今須佐  
之男惡仕業舞也 是ニ依テ、文ニ恐キ、天照神ニハ、天ノ石戸ニ籠ラセ賜候也。粵ニオヒテ、天津國  
 モ天ノ下モ、常世ノ闇ト成ニ矣、故ニ惡神如狹蠅益人惱候也。故ニ天津兒屋根之命ハ、高天  
 原ハ、安ノ河原ニ、萬ノ神ヲ集ハセ給ヒ、神議ニ議カラセ給ヒ候也。此ノ時科ヲ伊斯許理度  
 賣ニハ、八咫之御鏡石櫛度賣命ハ鏡携姫也 御玉ツケシ鏡ハ伊勢ノ大神 天ノ麻比止都神ニハ、太刀斧作ラ  
 セ候也。舊地堅始三津四津野刃持護魔舞是ノ傳也 天之日鷲之神ニハ、可自ノ皮モツテ、白和幣、長白羽之神ニハ、  
 麻ノ皮モツテ、青和幣今幣ニ麻紙ヲ用也 幡織姫ニハ、神御服織ラシメ候也。舊ウハ著舞是也 手置帆負ニ、彦  
 狹知命ハ、新宮營ミ候也。天ノ櫛明玉之神ニハ、八尺ノ勾玉作ラセ給ヒ今大神ニ繫玉是也、サセチ  
宮形ハ此久方ノ天津日嗣ノ御賣ト新宮也 御所放メ八尺曲玉 山雷ト、野槌之神ニハ、神ト笹ノ八十ノ玉串今願主ニ與フ多ノ玉串是也 天  
 ノ太玉之神ニハ、羽々迦ヲ取ラセテ、肩骨焼シメ占邊合サセ候也。サセチ是神代太麻ニトノ起、鹿之也 今節分豆ヲ燒晴雨ト  
 天之表春神ト下春神ニハ、木ト木ト打合、安樂ニ合サセ是今笏拍子亦拍子木也 天之加奈止美神ニハ、  
 天之香弓六張ヲ置ハベ、組ノ遠加世ヲ緒ニシテ、茅ト菅持テ、奏鳴ラシメ候也。此時黃金色

ノ鷄飛來リテ、御門ノ御幡ニ泊居耀キ候也。サセチ鳥居也 石戸之庭ニハ、篝火燒立今盛燈(セイトウ)也  
 長鳴鳴カシメ候也。サセチ鷄形也 石窟ノ戸脇ニ手力男之神隱立シメ。宇受賣之命ハ(中略)  
兒屋根之命、花長務彌宜翁、太玉之命ハ副長務權彌宜翁、手力男之命ハ、舊鹽吹、受賣命ハ舊於爾也

祝詞 (略)

神武天皇御即位紀元二千五百三十二年

明治五年十二月

中 設 樂 神 樂 長 皆 川 東 吉  
 槻 神 社 祠 官 兼 中 講 義 三 高 文 治 印

附記 原文は何れも萬葉假名に依る漢字であるが、便宜片假名に改めた。

以上の中「祭禮花神樂傳記」は、祭祀改革の趣意書とも言ふべきもので、一方「花祭神樂祝



事」は、在來の「花のほんげ」の祭文に代つて、祭祀の根本由來を説いたもので、總て改革の根幹を爲した點である。

中設樂の祭祀は、寛政年間同所の鍛冶職千代吉なる者が、古戸（ふつと）から傳へたもので、同時にそれ迄行はれて居た田樂を廢して鄰村足込に譲つたとの言傳へがある。其後明治維新に會して、世相動搖の際に當時郷社槻（つき）神社の祠官であつた三高文治氏を中心し、在來の形式を改革新法を編んだものであつた。勿論斯の改革の機運を爲したものは、一個佛道の跋扈を慨嘆した一派の力のみでなく、之が因を爲したものは、當時の世相であつた。而して三高氏の陰には、同氏の師であつた遠江の人中井大介氏があり、更に中井氏の因縁を辿つて、有力者の存在も想像に浮んで來る。之に配する一方、祭祀の中心である花禰宜即ち改革後に神樂長等と稱した皆川氏の迎合せる事實もあつた。今日から回顧すると、改革の爲には當然の歸結であるが、祭祀傳統の權化の如く思はれる禰宜が先づ動いた事は、一見奇異の感がせぬでもないが、當時の世相は思ひの外のものがあつて、一方に土地の事情も又その機運を招致した觀があつた。當時同所に於ては、在來の禰宜屋敷は勢力衰へて、皆川氏は實は其後を繼いだ一臨時の禰宜であつた。然も一方には、趣意書の記載にもある如く、中設樂部落の菩提所であつた曹洞宗東泉

寺住職の舉措等も考へねばならなかつた。今に言傳へる處に據ると、住職伊藤氏は世相の佛道に非なるを悟つて、昨日迄の須彌壇を一日にして御靈屋に化したとの事である。勿論其事實は信仰上の破綻でなく、斯くする事が所有財産の護持に因つたとの説もあるが、何れにしても之を默認した程の時世であつた。

東泉寺は祭祀には何等交渉を持つて居た譯ではないが、佛道は今にも掃蕩される如く不安に脅かされつゝ、あつた際である。一方祭祀に於ても官權の彈壓が加はつて、當時之に對する措置は、村々苦肉の物語りが各種傳はつて居る程である。更に官權の彈壓を一面から助けたものは、此山村を中心に起つた神道擁護の聲であつた。祭祀の廢止存續兩派の鬭争は、日に識んを加へるものがあつた。仍つて中設樂の改革は實に此兩派の妥協點を示したやうなもので、祭祀の中心であつた禰宜が改革說に傾いた態度等も、斯の雰圍氣を考へて判斷する必要がある。當時の禰宜皆川氏は、一般に「虎禰宜」の名で通つて居た人である。晩年は祭祀とも縁を斷つに至つて、一身に代へて秘藏して居た「しづめ」の面形を、後に中在家（なかなせき）の或屋敷に質物に托するに至つたさうであるが、遂にそれを取戻す期は無くして終つたと言ふ。其ため中在家には立派な「しづめ」の面形が遺つたが、後になつて改革を惜しむ一派の人々から、事情も究



めずに、傳統を破つた罰など、惡口を聞くのは寧ろ氣の毒である。

餘事が長くなつたが、扱祭祀改革の跡を観ると、結果に於ては在來の形式に、一流の意義と所説を敷衍したに過ぎぬとも言へる。根本即ち全般に亘つて、悉く傳統を覆した譯でなかつた。改革の中心點として、祭祀そのものを阿闍梨者流の手から救つて、古への設樂舞に意義づけんと爲した點は肯はれるが、伊勢神宮の記録に、設樂舞を設樂人が與つたとする點は單に井真齊なる者の某よりて傳聞せる事に根據を置いたに過ぎぬもので、一種の概念早く言へば思ひ付を具體化せんとの意圖から出發した觀もある。然も「さかき」を猿田彦神とし、「やまわり」を須佐之男神に意識づける爲には、面形の角を截る等の措置を敢て爲したが、之も見方に據つては正に毒に侵されんとする者を救ふ、一ツの手術位に考へて居たのであらう。此事實は今日から考へると、思ひ切つた暴舉とも見られ、延いて其改革が、徹底的に行れた如く感せしめるが、聲の大なりし割には、その及ぶ點は尠なかつた。寧ろ之に衝動を受け波紋の及んだのは、直接關係せぬ地方が大きかつたと言へる。

「さかき」は猿田彦神と名稱が變つても、村の人々には依然として「さかささま」であり、最も怖るべき威力を有つた何やら知らぬ神であつた。實は一個中設樂に限らず、祭祀全體を通じて

此種の影響は、已に幾度も繰返されて來たのである。偶々中設樂の改革が近世であつた事と、明治維新といふ大きな渦を中心として行はれ爲に、問題となつて残つたのである。保守的立場から不自然な此種の行爲を惜しむのは人情であるが、之も時世の風が起した一ツの波紋であつた、因果觀からすれば、嘗ては田樂を驅逐して代らしめた日もあつたのである。此改革に據つて、花祭りの行事が、時代から超越した残存でなく、時に時運に依つて、甚しい壓迫をも甘受した事例を示してくれた點には、吾々としては寧ろ感謝すべき點もあるので、此意味に於ては、傳統も又悉く單純ではなかつた。

尙最後に、改革に現はれた點を、行事次第に示して見る。

#### 中設樂花祭り次第

- 1 瀧被ひ
- 2 高嶺祭り
- 3 つちがため
- 4 竈ばらひ
- 5 神入り



6 しめおろし

7 四季の御神樂

(舊しきばやし)

8 岩戸開の御神樂

(舊とうこばやし)

9 大和御神樂又は花神樂祝事

(舊花のほんげ)

10 撥の舞

11 笛の舞

12 願主舞

(舊順の舞)

13 一の舞 三折り

清め桶、鹽、白米の手

(舊笹神を持つ)

14 地固めの舞 三折り

扇、やいば、つるぎの手

(舊と同じ、やいばは舊やちこま)

15 花の舞 三折り

扇の手

(舊は扇、鉢、盆の手)

16 須佐之男命

(舊やまわり)

17 三ツ舞 三折り

扇、やいば、つるぎ、

(舊と同じ、やいばは舊やちこま)

18 岩戸開の舞

(舊ねぎ。みこの伴の舞)

19 四ツ舞、扇の手

20 足名椎手名椎

(舊おきな。ひのねぎ)

21 稲田姫

(舊みこ)

22 大蛇退治

(新しく加ふ)

23 四ツ舞 やいばの手

(舊と同じやいばは舊やちこま)

24 大國主命

(舊茂吉)

25 四ツ舞 つるぎの手

26 猿田彦命

(舊さかき)

27 湯立て

28 湯ばやしの舞

29 しづめの舞

30 神返し



以上

註 以上の如き順序で、別に當日三日前に、「かたなだて」を行ふ事も舊の儘である。

次第の中、名稱はそれぞれ變改されたが、青少年の當る舞の手に於ては殆ど變る事はない。尙第十三番一の舞は持物を全部改め、之に伴ふ歌詞も新たに作つたやうである。

「うたぐら」の歌詞

歌詞は重要なものは全部手を加へたが、之又悉くそれが採用されて居た譯ではない。今日では當時の記録が一種の口傳化して遺つて居る。今それを記録にある分だけ舉げて見る。之も餘計な事ではあるが、他の土地の歌詞と對比して、變遷を知る一資料とも思ふのである。

撥の舞

- 1 あはれ打つ。太鼓の音はいそ神の  
わざおきふますふなそこと知れ

笛の舞

- 2 あはれあな。面白なるや大和笛

風の通ひ路神のまにまに

一の舞

- 3 天地の二つつ中の一の舞  
人ありてこそ清め清まる

- 4 清かれや幣ぞたぐさに一の舞  
舞ひて清めて舞ひて遊ばん

- 5 あはれ見よいと面白き一の舞  
雲霧はらふ白米ぞまく

地固めの舞

- 6 新かねのかためなりとて舞ふ扇  
末廣なるは君の御代かな(扇の手)
- 7 ひ、らぎの八千ほこたふりわたり來て  
國造りとて地かためぞ舞ふ (やいばの手)



8 劍立つ熱田の宮へ吾入れば

日頃のけがれけづり清むる (つるぎの手)

花の舞其他

9 しめの手に八ツ目の鈴をふりならし

うづめの神樂舞ひて遊ばん

10 氏神の南おもてにほかけ船

寶をつみて今ぞいりくる

11 香具山の天のまさかきこゝに立て

いついはさかと祝ひまつらん

12 土がねのいさほのつるぎ焼刃して

祝ひまひつるあくましりぞけ

13 神風の吹きつる方は清かれと

祈りゆくこそ伊勢の大神

以上はそれぞれ舞の重要な部分に謠つたらしいが、別に次のやうなものもある。改革の関係

者が羽田野翁に私淑して居た等の關係で、一面歌人であつたから、勝手なものを作つて謠はせたらしい。その中の二三を擧げて見る。

14 設樂打つ清めの時雨櫛葉に

うつして照す神のみてらし

15 古への學びのよらき本郷の

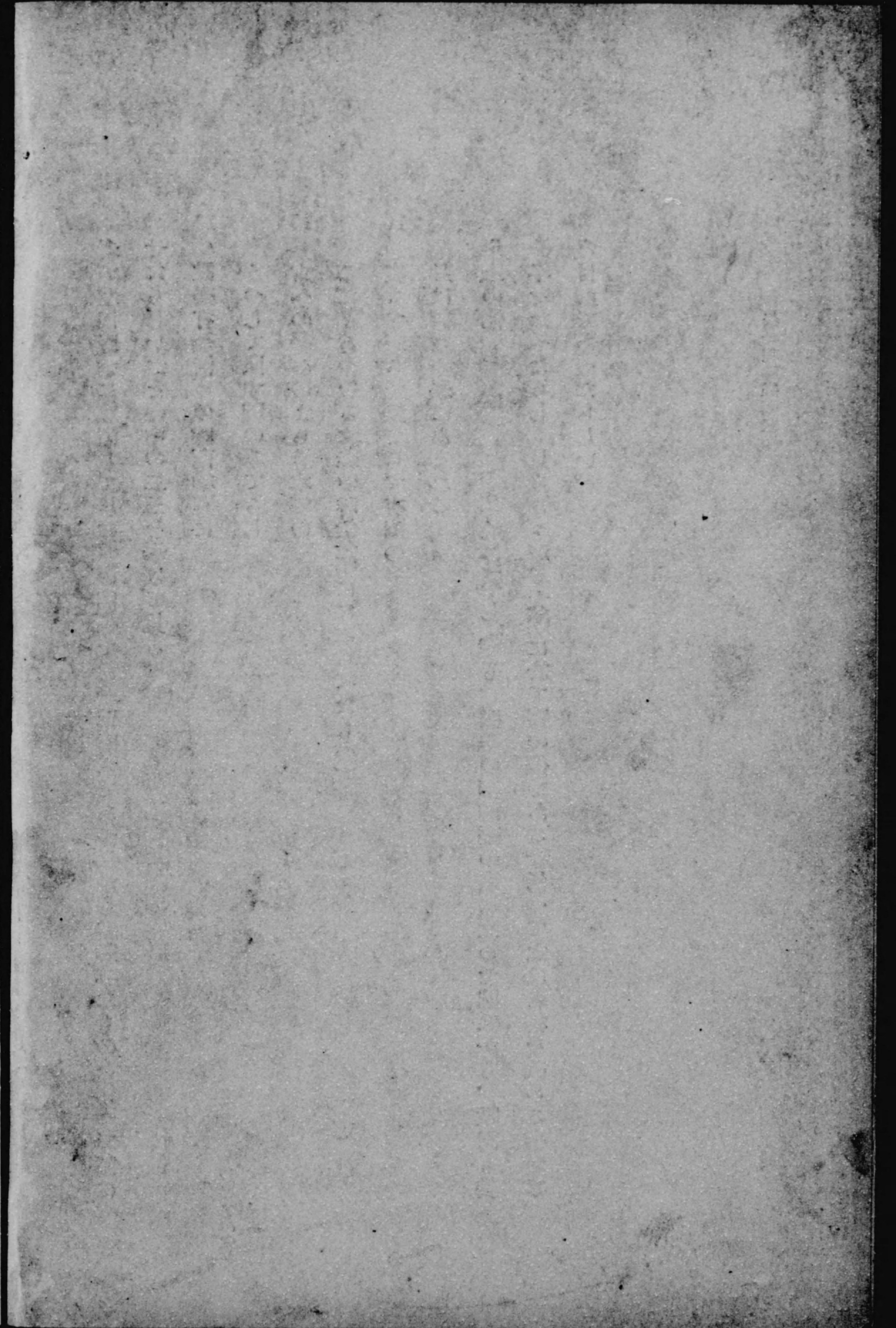
こだまあつむる大森の神(本郷になぞらへたもの)

16 夜もすがら此里てらす有明の

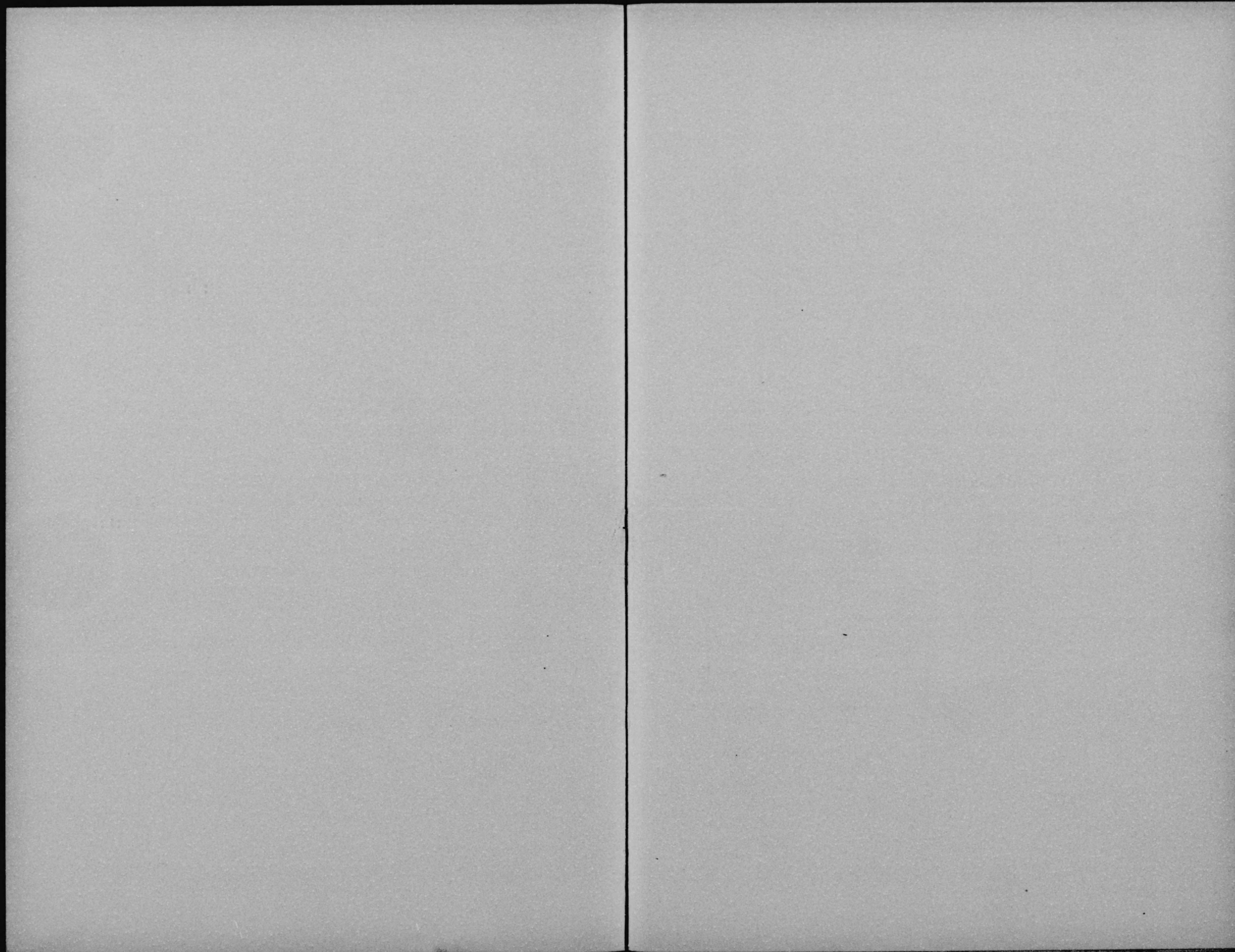
月は御殿の峯にあまれる

以上の他「しきばやし」「とうごばやし」等も、四季の御神樂の名に改めた關係から、歌詞も幾分手を加へたらしく見らるゝが、大體に於て舊の儘である。仍つて之は名稱を改める事が寧ろ目的であつたらしい。

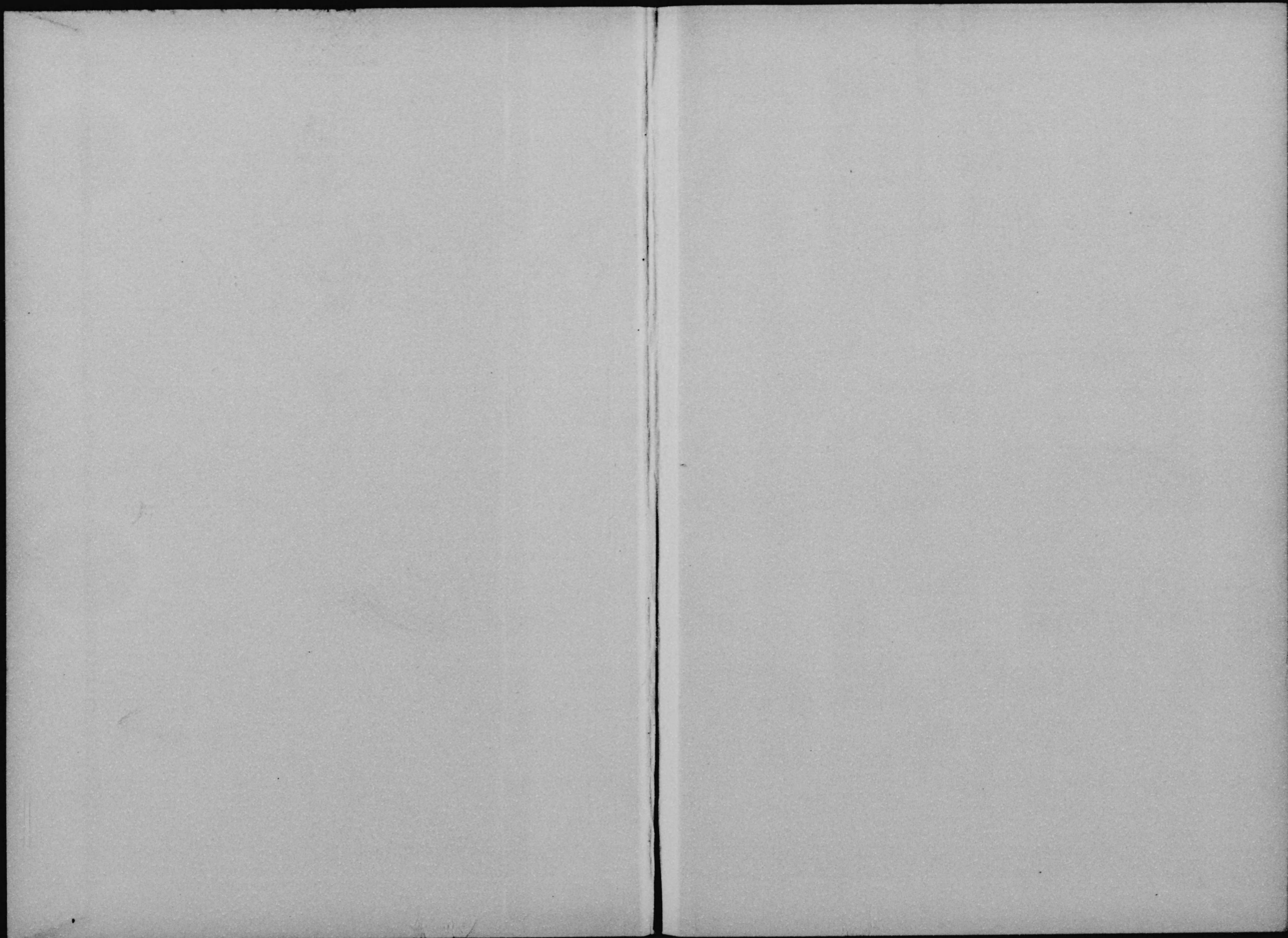














—



